

横浜開港資料館 平成 30 年度第 1 回企画展示

金属活字と明治の横浜

ー小宮山博史コレクションを中心にー



東京築地活版製造所の種字(たねじ)彫師、安藤末松作・旧蔵の木製活字
小宮山博史氏所蔵

1. 展示会期など

- 会 期 : 平成 30 年 4 月 27 日(金)～平成 30 年 7 月 16 日(月・祝)
- 会 場 : 横浜開港資料館 新館 企画展示室
- 開館時間 : 9:30～17:00(入館は 16:30 まで)
5 月 26 日(土)、6 月 2 日(土)、6 月 29 日(金)、7 月 14 日(土)は、展示室のみ
19:00 まで開館(入館は 18:30 まで)
- 入 館 料 : 一般 200 円、小中学生 100 円
- 休 館 日 : 月曜日(祝日の場合は開館し、翌日休館)
- 主 催 : 横浜開港資料館
- 共 催 : 横浜市教育委員会
- 後 援 : 朝日新聞横浜総局、神奈川新聞社、産経新聞社横浜総局、東京新聞横浜支局、
毎日新聞横浜支局、読売新聞横浜支局、tvk、NPO 法人東京タイプディレクターズク
ラブ、NPO 法人日本タイポグラフィ協会
- 協 力 : 小宮山博史、印刷博物館、横浜活字文化研究会、横浜セントラルタウンフェスティバ
ル実行委員会
- 協 賛 : ダイナコムウェア株式会社、株式会社 SCREEN グラフィックソリューションズ

2. 展示趣旨

漢字の金属活字は、19 世紀ヨーロッパでの東洋学の発展と中国へのキリスト教布教を両輪として生まれ、明治 2(1869)年に長崎に伝えられました。それまでの木版印刷に比べ、活版印刷ははるかに多くの情報を短時間でかつ広範囲に伝えることが可能になり、日本の近代化を支えています。

長崎に伝わった活版印刷術と金属活字はその翌年早くも横浜に伝えられ、「横浜毎日新聞」など活字による印刷物が刊行されています。明治後半になると、人口の増加と印刷需要の拡大、印刷機材の改良とあいまって、さまざまな印刷物が刊行され、活版印刷は広く一般に浸透していきました。

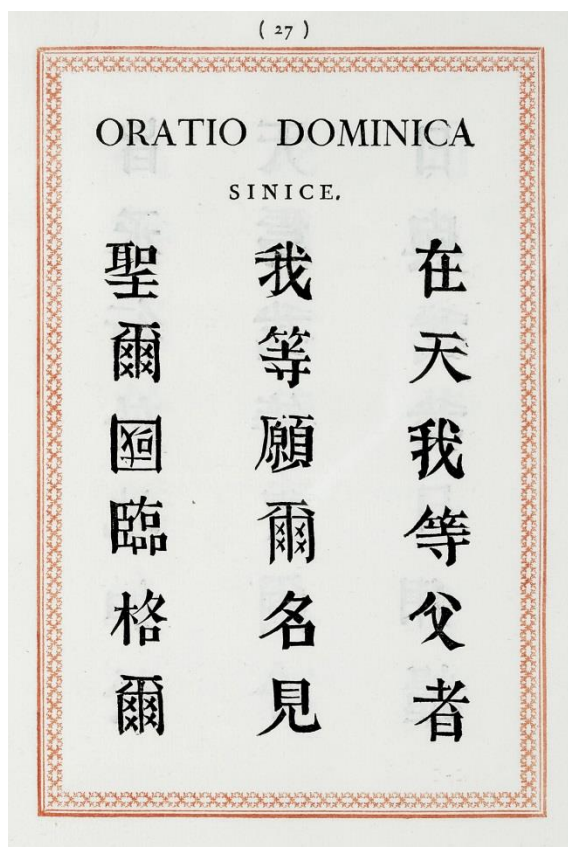
本展示は活字書体史研究家の小宮山博史氏のコレクションを中心に、日本の近代化の原動力を担った金属活字について、その誕生から日本への伝播、そして横浜における普及の歴史を明らかにします。

3. 展示構成

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1. 活版印刷 | 6. 木活字と鋳造活字 |
| 2. 金属活字の誕生 | 7. 連綿活字 ネーサン・ブラウンと翻訳聖書 |
| 3. 洗練される漢字活字 | 8. 明治期 横浜の印刷所 |
| 4. 横浜開港と『和英語林集成』 | 9. 活字を彫る |
| 5. 活版印刷の伝来 長崎そして横浜へ | 10. 様々な活字見本帳 |

4. おもな展示資料 (全展示数 約 150 点)

- ① 『150 の言語の主の祈り』(1805 年 パリ フランス帝国印刷所) の中国語部分
Oratio dominica CL linguis versa, et propriis cujusque linguae characteribus plerumque expressa. 小宮山博史氏所蔵



ナポレオン一世の命によりフランス帝国印刷所の総監督が編纂したキリスト教の祈祷文 (Oratio Dominica) 集。1804 年ナポレオン一世の戴冠式に招待されたローマ教皇ピウス七世への献辞が綴じ込まれている。祈祷文を 150 の言語で、かつ各言語固有の文字で記し、ほとんどを活字で印刷している。フランスは、19 世紀初頭から他のヨーロッパ諸国に先駆けていち早く漢字活字の開発事業を行なってきたが、本書にはその成果を生かし、中国語の主祷文が 40 ポイントの木活字で印刷されている。「國(国の旧字)」の活字が転倒してはいるが、漢字活字の開発が世界に先駆けてヨーロッパで行なわれたことを示す稀観本である。

② ウィリアム・ギャンブルとサムライたち 米国議会図書館所蔵



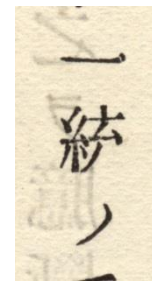
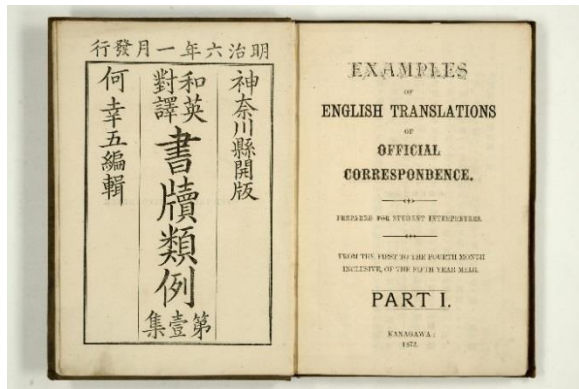
ウィリアム・ギャンブル(William Gamble 1830～1886 年)は、印刷技師で、中国に 12 年間滞在し、北米長老教会が中国に設置した印刷所の所長を務めた人物である。彼は、1869 年 11 月から 1870 年 4 月上旬までの約 4 ヶ月間、長崎製鉄所の所長、本木昌造の招聘に応じ、活版印刷術と金属活字の鑄造術を教えるため長崎に滞在した。そしてギャンブルが長崎で伝えた活版印刷術と活字鑄造術は、その年の年末には本木の部下である陽其二(よう そのじ)を通じて横浜に伝えられた。陽其二が横浜で印刷した明治初頭の書籍や刷り物には、ギャンブルが長崎で伝えた中国由来の活字が数多く用いられている。本資料は、ギャンブルと長崎造船所印刷局の人々を写した写真で、写真家上野彦馬が、長崎の上野の自宅に設けた写場で撮影したものである。横浜の印刷史にとっても欠くことのできないギャンブルの、長崎滞在時の姿を今日に伝える貴重な写真である。

③ 東京築地活版製造所の種字(たねじ)彫師、安藤末松作・旧蔵の木製活字 小宮山博史氏所蔵 (左) 安藤末松旧蔵の木製活字とルーペ・彫刻刀 小宮山博史氏所蔵 (右)



活版印刷に使われる活字を作るためには、最初に活字の元になる種字(原寸の凸字)を彫る必要がある。種字は、文字を雁皮紙に書き、逆文字にして駒に貼り、凸刻して作製するが、その作業は、細かく根気のいる仕事である。東京築地活版製造所は、ギャンブルの教えを受けた本木昌造とその部下平野富二が東京で創業し、昭和 13 年に廃業した活字製造会社であるが、同社の最後の種字彫師が安藤末松であった。小さな駒の上に凸文字を彫る技術を持つ者は、もういない。

④『和英対訳書牘（しよどく）類例』 第一集 何幸五編 神奈川県開版 横浜 横浜活版社 明治6(1873)年 当館所蔵



「欠画」部分

ギャンブルの教えを受けた本木昌造の部下、陽其二是、明治3年12月、横浜元弁天の修文館構内に開設された横浜活版社で、12月8日(1871年1月28日)、我が国最初の本格的な日刊新聞「横浜毎日新聞」を創刊した。本書はその横浜活版社が刊行した書籍で、明治5年1月から4月までの外交文書のいくつかを、日本文とその英訳の模範文例を併記した外交事務の参考書である。活版印刷であるが、使用されている活字には、特に中国で天子や貴人の名と同一の漢字を用いるとき、はばかってその字画を省く「欠画」が見られることから、中国由来の活字が使われていることがわかる。

5. 展示関連事業

●展示関連講座

第1回 5月26日(土)

「活字と活字見本帳が語るもの」内田明氏(近代日本語活字史研究者)

第2回 6月9日(土)

「印刷史のなかの美華書館—日本とのかかわり」宮坂弥代生氏(明治学院大学非常勤講師)

第3回 6月23日(土)

「日本活字印刷史の夜明け—上海のヘボンと吟香—」小宮山博史氏(活字書体史研究家)

〔時間〕14:00～16:00(各回)

〔会場〕当館講堂

〔受講料〕各回500円

〔定員〕80名(応募者多数の場合は抽選)

〔申込方法〕往復はがきに、郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・電話番号を記入のうえ、下記の住所へお送り下さい。はがき1枚につき1名のみの申込みです。締切:5月15日(火)必着
〒231-0021 横浜市中区日本大通3 横浜開港資料館 活字展講座係

●展示担当者による展示案内

第1回 5月12日(土)14:00～、第2回 6月29日(金)18:00～、第3回 7月8日(日)14:00～
各回30分程度を予定しています。入館券をお持ちのうえ、新館2階企画展示室入口にお集まりください。

●展示関連出版物『金属活字と明治の横浜～小宮山博史コレクションを中心に～ 資料』の販売

A4判、16頁、500円(予価・本体価格)

●横浜セントラルタウンフェスティバル Y159 参加プログラム

開催日の5月26日(土)、27日(日)および開港(開館)記念日の6月2日(土)は入館無料です。

お問合せ先			
横浜開港資料館	展示担当	石崎 康子	TEL 045-201-2136
	副館長	斉藤 司	TEL 045-201-2100

* 画像データをご要望の場合は右へ、ご連絡ください。横浜開港資料館 田中(広報) TEL: 045-201-2100